

はづかし病

—受賞作品概要

浅田厚美

簿でもいい成績をとり続けながら、恵子は夜半に聞こえる暴走族のバイクの音を羨ましい思いで聴くことがあった。親や世間に真つ向からはむかう行為ができる彼らに憧れながら、いつか自分もこの村を出たいと考えるようになっていた。

村の価値観が体に染み付いている恵子は、熟慮を重ね、誰からも文句をつけられることがない経歴を持ち、共に穏やかな家庭を築けると確信できる結婚相手を見つける。

そしてみんなから祝福されて合法的に家を出ることに成功するのだった。

生活がしやすく便利なうえに、誰も知る人はいない町で、彼女は二人の子どもを産む。成長するに従って、とりわけ娘の文緒は母親の恵子に容姿が似てくる。祖母に生き写しと言われるソノ子叔母だったが、紗代も叔母に次第にそっくりになっていった。こうやって受け継がれていくものかと、恵子はしみじみとした感慨を抱くのだった。

恵子が生まれ育ったのは、大阪南部の農村地帯だった。

父は七人兄弟で、そのうち六人が同じ村に暮らしていた。父のたった一人の妹であるソノ子叔母だけが、私鉄の駅に近い町の印刷屋に嫁いでいた。

十数人の従妹たちはみな年下だったので、親戚が集まる行事の時は、その子らを引き連れて遊びに行き、いろいろなことを教えてやったり、めんどうをみてやったものだった。そのせいで、四十八歳になった今でも、彼女は従妹たちから、「けえこねえちゃん」と呼ばれていた。

ソノ子叔母の娘である、五歳年下の紗代もそのなかの一人で、じつは恵子はじつと、この紗代のが気になってしょうがなかったのである。

文緒は何事にも前向きで、超氷河期といわれた就職活動にも果敢に挑戦し、みごとに第一志望の会社の内定通知を受け取る。

それを見た恵子は、自分が肯定されたような気持ちにして涙をこぼすのである。

一方、学生時代をスポーツに熱中して過ごした紗代は、お洒落や恋愛など、女の子らしい華やかなことに全く興味を失めさなかった。

「紗代ちゃん、ちよつとはお化粧しないの」と尋ねても、

「そんな恥ずかしいことできない」と答えるばかりだった。

紗代はいくつかのお見合いの話にも頑なに耳をかきさなかった。そうしてそのまま年をとって、今では、両親の介護に明け暮れる毎日を送っていた。

夫が校長になり、自身も地域の民生委員を務めるようになった恵子は、紗代の将来を気に病むソノ子叔母を哀れに思っていた。

紗代は太り続けており、なにかかもを

村での暮らしは人の目や評判をいつも気にしてはいたくはないけなかった。

彼女の母は、「格好わるいことはできません」と言いながら、村の付き合いや礼儀を守り、大きな出費となる慶弔費を家計から捻出していった。

そんな村のなかで、恵子はかなりの優等生だった。髪を染めたり派手な服を着たりすることもなく、耳にピアスの穴をあけることもなかった。

休日には畑仕事の手伝いをした。うわついた気持ちは持たず、真面目に勉強して大学に進み、卒業後は親の期待通り、地元の学校の教師になった。

学校の通信簿と同じように、村の通信

持て余してどうにもできなくなっているように感じて、そういう紗代の生き方に歯がゆさを募らせていた。

「なんで、あんたはそんなふうなの」と、ある時、恵子は自分の気持ちを紗代にぶつける。

「ずっとこのままでいいの？ 自分の幸せも考えたら？」

という問いに、紗代は、「しあわせ？」と、問い返す。

「けえこねえちゃんは幸せそうやもんね。でも、私はそういうのだめやから」

「だめって？」

「うん。やっぱりね、恥ずかしいねん」

また、病気が出た、とうんざりする恵子だったが、紗代から、「私は恥ずかしくてたまらん。けえこねえちゃんみたいなのが。なんでわかれへんの？ けえこねえちゃんはかしこいの」と言われて衝撃をうける。

厚化粧に見えないよう細心の注意を払ったナチュラルメイクをして、デパートで買った質の良い洋服を身につけ、外国のブランドではなく、国産の伝統ある店

のバッグを持ち、それなりに高級な車を運転し…、という自分の信じてきたスタイルが、恵子は急に恥ずかしく思えてくるのだった。

満たされたい、心の平穏が欲しい、認められたい、命を繋ぎたいという人間の本能に忠実に、エネルギーを使ってきたことが、下等なこと、醜いことだと、紗代に見下されていたのである。

そんなはずはないと、否定しながら、いつも心のどこかでうしろめたさを感じていた自分を恵子は知っていた。

「そうかもしれない」

足元から波がひいていくような意識の転換のなかで、体がよじれるような恥ずかしさを恵子は感じた。

醜く太った紗代の姿が清らかに見えはじめた恵子は、「はづかし病」に罹ってしまったのだった。

ソノ子叔母のからっぽになった印刷工場跡の跡に佇む彼女に、豆腐屋の吹くラッパの音が聞こえる。

いつかどこへ帰ればいいのだろうか、恵子は思うのだった。